

恩師 粵王先生亡き今思ふこと(三・四)

坪 博康

(三) 戦後レジーム脱却と集團的自衛權行使容認

平成二十七年五月二十四日

粵王先生『眞の保守とは何か』(平成二十二年七月)に曰く、

安倍内閣のスローガンは戦後レジームよりの脱却とて、事の核心は、畢竟、憲法改正と教育關係法なり。安倍内閣の先づ著手したる教育基本法改正の後は、最早憲法問題を残すのみ。然れども、當面の實質的問題は憲法九條にして、殊に集團的自衛權の行使問題なり。願はくは、我が存命中に集團的自衛權行使の容認を實現し、以て戦後レジームよりの脱却を見んことを。此我が念願なり、と。

先生の「集團的自衛權偶感」(平成二十六年七月五日掲載)は安倍首相「父子三代」の功を讃ふると共に、先生御自らの安堵をも顯すものと今拜讀す。先生御存命中の御念願成就は、實に喜ばしきことなり。

(平成二十七年六月十四日受附)

(四) 粵王先生の日米「同盟」事始め 坪 博康

平成二十七年五月二十四日

粵王先生、昭和五十年代初頭、防衛參事官として實に三百回に及ぶ國會答辯にて「同盟」の語を用ゐ給ふ。戦後の日本に於て、「同盟」の語の公式文書に現ることは稀なれば、前代未聞の業なりき。昭和五十六年、鈴木善幸首相訪米の際、事務方其れ迄の防衛參事官答辯を踏まへて「同盟」の語を首相演説に挿入せり。首相、演説を棒讀み同然に發出するも、後刻自らの發言内容に氣付き驚愕し、而して記者會見にて「日米同盟關係に軍事的側面なし」と釋明せり。某書に曰く、米側其の釋明に呆然とするのみ、と。

先生の御業、眞に日米「同盟」事始めといふべし。爾來三十有餘年、冷戦は終結し、中國軍事的擡頭を始め、變動著しき現下の情勢の中、第二次安倍晉三内閣にて日米防衛協力指針の再改訂に至れり。茲に、日米同盟のさらなる強化を觀る。實に隔世の感あり。

(平成二十七年六月十四日受附)